

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

粥川のウナギはもういない、という話は前から聞いていたが、まさかという気もして、半信半疑で昨年十一月、私は美並村教育委員会の K 氏のご案内をお願いして粥川を訪ねた。

そんな時分にウナギなど見るはずはないのだが、どうしても年内に現地調査をしなければ、私の責任が果たせなかつたので、やむなく K 氏にお願ひして訪ねたわけである。

粥川は、河口から上流の三枚滝までの約六・五キロメートルがウナギの生息地として国の天然記念物に指定されている。

私は、K 氏の車で沿岸をさかのぼりながら、まだ残んの色香がただよう紅葉と、それを映して流れる溪谷をながめ、せせらぎの音に耳を傾けた。

年配の人なら、一むかしか、二むかしも前の、この川独特のウナギの群生状態を思い起こすことができるだろう。粥川ではウナギは神の使いであると信じられていた。平安期のむかし、藤原高光が勅命を受けてこの村の西南にそびえる瓢箪(ひょうたん)の悪鬼を退治したという伝

説と共に、村人はウナギを神の使者として神聖視し絶対的に獲らなかつた。ウナギはどんな欲な人間の餌食となることを免れて、村人に親しんだ。粥川では人間を恐れる必要がなかつた。ここはウナギの天国であつた。

いま、「粥川の歴史と家譜」によって、当時の面影をしのんでみよう。

——粥川ではウナギをとると葬式につきあつてもらえなかつた。

文化財を守る人々

会長 野田直治

ようとする車がつぎつぎと入つてくると、ムツゴではウナギは見向きもしなくなる。その時の秘訣がひとつある。それはアユである。アユを川石でつついても飲んで流すと、必ずウナギは姿を現わす。ウナギは、しんからアユが好きらしい。

このように、村人に親しまれたウナギであつたが、戦後、車の騒音や排気ガスをさかんにまき散らしながら観光客が入りこんでくるようになつて、ウナギ

の生活がおびやかされ始めたことを、右の記録が示している。ウナギはだんだん減少した。そこへ、ウナギの大難

が襲つて来た。K さんのお話しによれば、一〇数年前、ウナギのシラハダ病が入つて来た。全国的な流行で、有名な浜名湖の養殖場でもウナギがばたばた倒れた。粥川でもほとんどウナギがやられた。ウナギの生命を守るために地もとではいろいろ対策を講じたが徒勞であつた。ウナギは全滅状態になつた。ウナギのいなくなつた粥川は、もはや平凡な他の谷川と異なるところは

ない——これは神に対する信仰心がなくなつたからだ、といつて嘆く老人もあつたという。

しかし、いま私が K さんにお願ひして粥川を訪れたのは、単に昔を回顧するためではない。ウナギのいなくなつた粥川に再びウナギを呼びもとそうとする運動があることを村教委で聞いたので、その状態を見るためであつた。

その名を十五日会という。毎月十五日に例会を開くので、そう名づけられたものだが、この地の青年の有志が集まつて交歓する親睦会である。この十五日会がウナギの復活に乗り出した。四年ほど前から、毎年稚魚を二〜三〇キロずつ購入して、一ケ年養殖し、二年目に放流する。すでに一〇〇キロ余の稚魚が放流されたわけだがまだその効果は現われない。養殖の稚魚が川になじまないためだといふ。一度失われた、天然ウナギは、これを再びとりもどすことがどんなにむずかしい課題であるかを私は痛感した。

が、それにもかかわらず、絶滅に瀕した文化財の復活を願つて、懸命の努力をしている若い人々のあることを忘れてはならない。

經典・佛像の旅

畑中淨園

仏教が中国へ初めて伝えられた年代には諸説があつて決定し難いが、一般には後漢の明帝の永平一〇年(六七)白馬に乗つて経・像が都の洛陽に來たので明帝大いに喜び洛陽郊外に白馬寺を建ててこれを奉安した。これを中国への佛教の初伝としている。日本への初伝は従來は欽明天皇の一三年(五五二)百濟の聖明王が佛像・經文を献上したという。しかし実際には宣化天皇の三年(五三八)説が有力とされている。いづれにしても佛教の伝來以後、中国からは西域・印度へ、日本からは中国へ、像と経を得るため非常に多くの僧達が身命をかえりみず求法の旅に出発したことは注目せねばならない。中でも有名な求法僧の一人は東晋の僧法顕であつた。彼は隆安三年(三九九)同学の惠景・道整等数人と共に長安を出発し、義熙一〇年(四一四)多くの経・像を得て帰国した。その旅は前後一五年を要し、しかも帰り得たのは

彼一人であつた。帰国後彼が著した旅行記「仏国記」はのちの唐僧玄奘の「大唐西域記」と共に二大旅行記として西域や印度研究の指針となつた。当時これらの求法僧達はどうな経路で印度に入つたのか。「仏国記」に、

「長安を發して西のかた流砂を渡る。上に飛鳥なく下に走獸なし。四顧ほうほうとして測る所なし。ただ日を見て東西を知るのみ。人骨をのぞみて行路の標とす。しばしば熱風・悪鬼あり。これにあえば必ず死す。……葱嶺(パミール高原)に至る。嶺は夏冬雪を積む。悪竜ありて毒を吐く。……危壁千仞に立ち、昔人ありて石をうがつて通路に梯道を施す。凡そ渡ると七百余所なり。……小雪山を渡る。寒風にわか起る。惠景あえぎおのき進むあたわす。頭(法顯)に語りていわく。われ死せんのみ頭さきに行け。とどまらば共に死せん。言絶えて死す。頭これを撫して泣いていわく。もとより身命を圖らず。いかにせんやと。また自力孤行してついに山險を過ぎ、およそ経る所三〇余国、ついに天竺(印度)に至る」と。

交通路は(1)游牧民族が専ら通つた草原の道(ステップロード)(2)中国産の絹がベルシアを経てローマに運ばれたオアシスの道(シルクロード)(3)南海を渡り印度の沿岸を経てペルシア湾・紅海に至る海の道とがあつた。このうちもつとも利用されたのは(2)のオアシスの道である。この道は図の如く三つに分かれてゐる。天山山脈の北の道を天山北路の道といい、天山山脈の南麓の道を北道、コンロン山脈の北麓を通る道を南道といつた。この南北両道は砂漠の中のオアシス都市を縫うがごとく西進してカシュガルで出会う。法顯の通つた道はこのうち北道であつた。

越えなければならぬ。世界の屋根といわれるこの高原は標高七八千メートルの峰が天にそびえ立ち、ここを越えるのには今日では中国側の規則として必ず血圧と心電図の身体検査を受けなければならぬといふ。それは高山病のほげしい頭痛や呼吸困難をもたらすからである。「仏国記」にいう悪竜ありて毒を吐くといふのはこの高山病をさしているであろう。法顯の同行者惠景をはじめ数人がほとんどここで倒死したのである。法顯はこの旅行からおよそ二〇〇余年後に印度に行つた唐僧玄奘は、往路はこの難所をさけて中途から天山山脈を北にこえて中央アジアへ入つてゐるが帰路はこの高原をこえ南道を通つて帰国してゐる。これまた一七年間の旅であつた。このパミールをこえるとその西には中央アジアの平原がひらけてくる。その中心はサマルカンド(現在のソ連邦ウズベク共和国の都市)である。アラル海に注ぐアム・シル両川の間中にひらけた古代都市で、湿気が少なく夜空の星が美しいことは世界一ともいわれている。かつて一四一五世紀にさかえたチムール帝国の首都である

「長安を發して西のかた流砂を渡る。上に飛鳥なく下に走獸なし。四顧ほうほうとして測る所なし。ただ日を見て東西を知るのみ。人骨をのぞみて行路の標とす。しばしば熱風・悪鬼あり。これにあえば必ず死す。……葱嶺(パミール高原)に至る。嶺は夏冬雪を積む。悪竜ありて毒を吐く。……危壁千仞に立ち、昔人ありて石をうがつて通路に梯道を施す。凡そ渡ると七百余所なり。……小雪山を渡る。寒風にわか起る。惠景あえぎおのき進むあたわす。頭(法顯)に語りていわく。われ死せんのみ頭さきに行け。とどまらば共に死せん。言絶えて死す。頭これを撫して泣いていわく。もとより身命を圖らず。いかにせんやと。また自力孤行してついに山險を過ぎ、およそ経る所三〇余国、ついに天竺(印度)に至る」と。

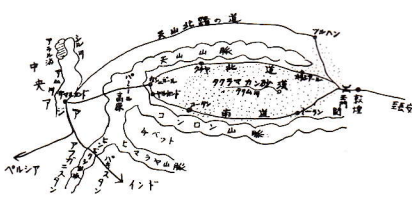
中国最果ての街敦煌を過ぎ玉門関をぬけるとたちまちタクラマカン砂漠が広がつてゐる。「仏国記」にいう西のかた流砂を渡るといふのはこの砂漠のことで、風によつて砂が川の如く流れるので、この地方を流砂地方といひ、またその砂の流れる音が鳴り響くので鳴砂地方ともいつた。ここを通る道はまさに「四顧ほうほうとして測る所なき」道である。

砂漠を過ぎた南北両道はカシュガルで一本となつてパミールを

越えなければならぬ。世界の屋根といわれるこの高原は標高七八千メートルの峰が天にそびえ立ち、ここを越えるのには今日では中国側の規則として必ず血圧と心電図の身体検査を受けなければならぬといふ。それは高山病のほげしい頭痛や呼吸困難をもたらすからである。「仏国記」にいう悪竜ありて毒を吐くといふのはこの高山病をさしているであろう。法顯の同行者惠景をはじめ数人がほとんどここで倒死したのである。法顯はこの旅行からおよそ二〇〇余年後に印度に行つた唐僧玄奘は、往路はこの難所をさけて中途から天山山脈を北にこえて中央アジアへ入つてゐるが帰路はこの高原をこえ南道を通つて帰国してゐる。これまた一七年間の旅であつた。このパミールをこえるとその西には中央アジアの平原がひらけてくる。その中心はサマルカンド(現在のソ連邦ウズベク共和国の都市)である。アラル海に注ぐアム・シル両川の間中にひらけた古代都市で、湿気が少なく夜空の星が美しいことは世界一ともいわれている。かつて一四一五世紀にさかえたチムール帝国の首都である

り、ここには当時世界一の天文台があり多くの天文学者が集まつたといふ。このサマルカンドから道は南下東行してもう一つの険しいヒンズクシ山脈を越えると西北印度へ入るのである。一方シルクロードはこの都市から南下西行してベルシアに入り、さらに地中海に出てローマに達するので、中国産の絹は古くからこうした経路をへてローマに運ばれた。逆にまたこのような道を通つて東方へ運ばれたのは、ローマやベルシア・印度の文化である。毎年展観される正倉院展に見られる御物の中には冬唐草文様の入つた工芸調度品・琵琶・胡瓶・坏などそのいづれにも西方文化のあとが色濃く残されておられ、正倉院はシルクロードの東の終点である

シルクロード(オアシスの道)



(三) スーシ(三つ)

古瀬戸の壺

河合俊次

古瀬戸の壺という私達はすく
国の重文に指定されている、長滝
白山神社の古瀬戸灰釉瓶子を想起
する。これは正和元年（一一三二
年）の紀年銘が入っており、而も
当時深い信仰を集めていた白山神
社に尾州愛智郡の住人清原広重が
神前に備える酒器として奉納した
ことがわかる。

もち、その名も全国によく知られ
ている。



灰釉瓶子
勸乗寺跡出土

香炉等の宗教用具をはじめ
水注、水滴、合子、燭台等
の日常用具がつくられ、室
町時代には茶陶の流行から
天目茶碗や茶人もあわせて
つくられるようになった。

古瀬戸の源流は、平安時

代の白瓷とされているが、その器
種や器形は、当時舶載された中国
陶磁をモデルにし、その文様や装
飾も中国のものが取り入れられて
いる。現在知られている文様は大
別して、印花文（文様を印判によ
り押しつけたもの）、劃花文（へ
らなどにより彫りつけたもの）、
貼花文（文様をはりつけたもの）、
櫛描文（四〜五本の櫛で線をつけ
たもの）などがあり、その釉薬は
木灰などを使った灰釉（淡黄緑色
）と粘土の中に含まれる通称鬼板
と呼ばれる酸化鉄を使った鉄釉（
黒褐色）などがある。

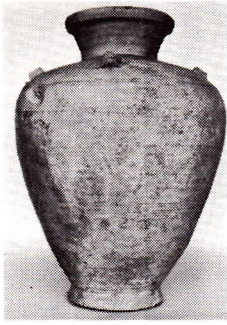
さきにも述べたとおり、
古瀬戸の用途は宗教用から
一般雑器に至るまで各種あ
るが、その中で壺は火葬威
骨器として出土する例が極
めて多く、その外に祭祀用
瓶子、蓄銭用器として出土
する例もある。

現在、大和村で出土している古
瀬戸の壺四箇のうち、三箇は威骨
壺として、一箇は蓄銭壺として出
土しているが、牧の勸乗寺跡と伝
えられる土中より出た灰釉瓶子お
よび尊星王院跡より出土の四耳壺
は、いずれも鎌倉時代の威骨壺で
あり、剣の観音堂附近の墓地より
出た四耳壺は室町時代の威骨壺、
なお、万場の水田より出土した壺
は室町時代の蓄銭壺である。

いづれにしても、これらの古瀬
戸の壺は、中世における大和村の
歴史を語りかけるものであり、い
わば、もの言わぬ歴史の語り部と
して、今後末長く大切に保存され
なければならぬものであると思
う。

△参考資料▽

- 小学館 世界陶磁全集
- 平凡社 陶器全集 その他



四耳壺
尊星王院跡出土

り、一般庶民用の日常生活
用具というより、主として
貴族、武士、社寺等の上層
階級を対象につくられたも
のと考えられている。

また、その種類は鎌倉時
代には四耳壺、瓶子、花瓶



四耳壺（白雲山出土）

これらの求法僧をして、この困
難な事業を遂行せしめたのは、実
は經典や仏像の力であろう。いう
ならば、經・像は自らの力によっ
て求法僧の手となり足となって険
阻な峰を越え、砂漠の熱風に耐え
荒れ狂う海を渡り、長途の旅をつ
づけて、現在の私達のところへ到
達したのである。

（二ページよりつづき）
いわれている。それはともかくと
して、このような険阻な道を仏像
や經典は命がけの求法僧達によつ
て中国へ伝えられたのである。そ
うしてこれが日本に伝来するには
これまたはかり知れない困難がと
もなった。
日本が大陸文化を取り入れるた
めに、遣隋使三回、遣唐使が一五
回も派遣された。その盛時には一
行五〇〇人をこえたといわれるが
その中には、多くの留学僧・求法
僧が入っていた。

その渡海の往復がいかに危険で
あったか、中には經典と共に海底
の藻屑となった僧も多かったにち
がいない。
井上靖の「天平の甕」にもこの
渡海の困難さがあますところなく
えがかれている。

昔の道(徳永区内)

越前街道

木島 泉

空想は、いつもどこかの記憶に結びついて広がっているのかも知れない。越前街道が私の家の前を通っていたという話は、私が嫁いで来たばかりの頃から耳にしていた。その頃は、今よりもまだ道らしい形を保っていた。鍛冶屋の前から右方へ入ると豚小屋があった。まっ暗な夜道るときはちよつと怖い思いで通ったものである。その頃は公盆堂で映画や演劇などがしばしば上演されていたので、夜お



(徳永薬師下より大野口橋へ至る道)

そくそこを通るといことがあったわけである。

家の横手の土蔵のうしろに清水があり、いくつかの伝説を秘めていた。当時はまだ天秤をかついで水汲みにくる主婦たちがあつた。水を汲み、菜を洗い、ウリや西瓜を冷やしたりしていた。水は大切にされて、洗顔を足洗うのも洗濯物をゆすぐのも下の池の方で行なわれていたのである。

そこに大きな樺の木があり、今は枝をはたいて坊主になってしまっているが、昔はうっそうと枝葉が茂り、夜になると化けるといわれていた。

街灯もないまっ暗な細い街道には確かに怪異な現象もあつたことであろう。

清水は街道を通る人たちにとつて格好の休息場であつた。馬をつなく木というのも近年まであつたということである。多分、コンクリートなどという便利な、しかし味気ないもので周辺を固められる以前は、しつとりとした旧街道の面影がまだそこはかとなく残っていたのに違いない。

越前ぼつかとよばれる人たちが焼そばなどをもってきて、魚肉類

の乏しいその頃は珍重された。富山の薬屋も来た。彼らは皆この街道を通って行つた。美濃から越前へ、越前から美濃へである。

清水の伝説の中に、石の話がある。今もあるのだが、清水の底にまん丸い石があつて、その石の下に鳥の形が浮き出ているという。同じ石がもうひとつあつた。それは越前ぼつかが、越前へ持って行ってしまつた。

それから後はこの清水は半分は越前の方へ行つてしまひ、半分しか湧出しなくなつたのだそうである。即ち月の十五日間はどんなに干天が続いても水が湧き出ずし、あとの十五日はびたりと止まつてしまふのだという。

越前ぼつかが持つていつてしまつた水の霊異を語る古老たちの心の中には、それが間欠泉であるとかなどという科学的解釈は必要ないのであつて、そういう尊い水だから、そまつにするに罰が当たると私達は常にいましめられていた。迷信だ一笑に付す前に、私は昔の人のそうした敬けんさが実は人間の生活を守る上において最も大切なことを教えているのだと気付かせられるのである。

清水の道は、だから地の底の方のどこかで越前のその清水とつながっているのだとも聞いた。

昔々、ある尊い僧が重病の床で「あの清水が飲みたい。」

といわれたので、はるばると汲みに来た者が、八幡の宗祇水を汲んで帰って飲ませた所

「この水ではない、もつと上の猿が清水の水じゃ」といわれたという。

どんな旅人たちが通つたのか知らない。さまざまなおもいを抱き、ここで一休みしてはまた上り下り歩みつづけたことであろう。

うすうすと残っている昔の道のあとは、徳永では平野さんの酒屋のあたりから来て、たに屋の裏の細い道がそうであるときいたし、それから矢野原孝一さんの前を入り家の前までくる道。清水をぬけて登り道になり、そのあたりは少し変わっているが、山手の方から薬師の下へぬけていくのらしい。そこから大間見へ行く橋があつた。もう昔の道といわれるものの面影はほとんどない。道は舗装され広々と新しく出来上つていく。それが現代の道である。



(猿が清水)

車で走りぬけていく道には道の辺の雑草の表情に心を傾かせ、自然に湧出する清水を飲むゆとりも持たないかも知れないと思ふ。

時の移りをさかのぼり、わずかな姿をとどめている道にたえずむとき、その遠い昔の道への追憶は私の嫁いできた頃の思い出と結びついてしまふ。そこからはなれての発表はない。

それにしてもまあ、なんと新しい道路の増えたことであろうか。道、道、道。それはまさしく現代の象徴であり、入り組み、広がり、ややこしくなり……道はすなわち、合理以外の何もでもなくなつてしまつた。

奈良正倉院展

見学記

須甲甚一

導かれともに歩みて人の世の誠のみちにありぞうれしき
 昨年の一〇月三十一日の早朝、私たちは二台のバスに乗って、正倉院見学の一日旅行に出た。すべて事務局の先生方のお世話になり諸先生。諸先輩とこ一緒させていたでいて大和路さして車を走らせた。その日の浄き思い出は恐らく生涯忘れられないであろう。車中で河合先生から奈良文化について懇切な御説明をいただき、みんなの心は早くも奈良の古都へと走り御説明が終わると車中は拍手で一ぱいであった。正午過ぎ奈良に着き若草の麓の茶屋で昼食をとった。そのひとときの楽しさもまた格別、古代文化を心に描きながら国立博物館に向った。全国から寄り集う老若男女、互いに思いは同じ古代日本の姿に触れる喜びと期待に胸をはずませている。優雅な正倉院の香りが漂い会場に入って押し合う人波にもまれながらそれぞれに心して観賞する人々こそ古代大



(正倉院展見学)

和の文化を慕う日本人の美しい姿であると思つて、河合先生の御説明を思い出しながら目前に陳列された貴重な作品に見とれた。漫背鏡・千人花虫八角鏡・平螺鈿背円鏡・そのかがやき、琥珀の細工に花鳥を彩る優美さは、世界的な文化の高さを示すものだ。「曇りなき鏡に写すわが心」と読んで静かに目を閉じつつ、紫檀槽の琵琶を奏でた古人の姿を思い浮かべると自分もまた古人となつて詩を吟じているような錯覚に陥つてしまふ。恐れ多い話だが、天皇・皇后両陛下もこの琵琶を御高覧になり、観賞なされたと聞く。定めし皇祖の昔を親しく偲ばれたことだろう。

鳥毛立女屏風の美、古代婦人の髪形・顔の化粧など見るからに菩薩そのものようである。生々とした表情。眉・口紅のやさしさに心を引きかれる。屏風は遠く印度に発しベルシフを経て伝来したもので東洋古代文化の面影を偲はすと聞く。瑪瑙環・漆塗の器類・金銅八曲長坏から御裳袷箱など中国伝来の美術、東洋古代文化の粋を集めた奈良の文化は今もなお、諸人の心に夢と喜びを与えてくれる。ことに印象深いのは塑像の仏様で漆を何回となく塗り重ねた末、人々が仰拝する気高い姿となつたのであろう。石仏・土仏・金銅仏・木仏など慈悲深い諸仏のお姿は永遠に変わることのない如来の御教えを我々に説いている。あゝこの日の思い出は清く深い感銘を心に刻みつけてくれた。私達は今活眼を開いて日本文化の伝説とこれを創造した祖先の偉大な精神に学んで御仏の悲願に応えさせて頂きたいと思う。一日の見学を終つて帰途につき、車中で聞く野田会長さんの挨拶もほほえましく、一同大和路の名残を惜しんだ。

二月一日〜二日
 村内城跡調査
 東海古城研究会副会長林春樹氏指導の下に、村文化財保護審議委員・村史編集委員において、村内城跡を調査し、篠脇山麓には、東氏居館跡がなければならぬことを指摘された。松尾城跡付近の構え、木越城跡に堅堀外立派な遺構のあることも指摘された。
 三月七日
 ●名血部沢池調査
 湿原植物生育地である名血部久仙の沢池の区域面積を村文化財審議委員において地元有代喜平氏の案内にて調査する。
 四月二日
 ●福田古墳出土品管理を村教育委員へ
 昭和三〇年出土以来、保存管理を続けておられた田中善児氏より申し出があつて、村教育委員会で管理することとなり、村民センター二階に展示した。
 六月一日
 ●天然記念物三件県指定となる
 明建神社の社叢、口神路白山神社の六本ヒノキおよび、下栗果の

領家のモミジが岐阜県天然記念物に指定された。
 六月二八日
 ●篠脇山麓で陶磁器片出土
 現場整備工事現場において、東氏居館跡と思われるところから多数の陶磁器の破片が出土したのでとりあえず工事を中止してもらい翌二九日と七月一日に調査した。出土品の中には、中国の宋代に焼かれた青磁・青白磁・白磁の破片や、天目茶碗の破片もまじつていて、東氏文化の高さが想われた。
 七月五日
 ●県文化課から篠脇山麓調査に来村
 県文化課羽田野主事来村、篠脇山麓を調査され、東氏居館跡に違いないだろうとのことであつた。当日各新聞記者も現地へ取材に来て羽田野主事の説明を聞いてゆく。
 七月二〇日
 ●領家のモミジ調査
 村指定天然記念物「領家のモミジ」の枝の一部が枯死したので、その保護について、岐阜県文化財保護審議委員堀武義氏指導の下に村文化財保護審議委員において調査したところ、畑の通路を造るために木の南方の土が削り取られ、



池田 弘

円空仏

童等が水浴の浮木にせしと云り円空仏は笑みてまします
モナリザの微笑に似たる笑もちて円空仏は荒きな彫り
経唱え仏をききむ円空の深きまなざしここに見ること

石神堯生

南宮神社のみみじ

幾世をも子らと戯れきて傷痕を樹齡に刻みぬ巨木もみじは
広ごりし枝下に涼とる農繁の人らに一時団欒供せり
神々の坐せる宮森神杉を分けて錦の紅葉映ゆるも
人影の絶えし黒田に風吹かば散れよもみじ葉錦帯のごと
柳がい唄響む神奈備集い来る親族同族にいや重け吉事

松井京二

正神路にて

首にかざり腰に直刀この路を七代の宮居に詣でたまいし

時うつり人はかわりて通り行く鳥居の杉は見守りたもり
大神楽帰りの曲に合わせ舞い獅子は行きつつもどりつつゆく

村井正蔵

松尾城跡

いくとせの我が故里を語りつき松尾城跡は今日も暮れゆく
つわものら血を流したる城跡に建てし標柱夕日に白し

加藤先生頌徳碑の建立に想う

村の平和人々の幸を念じつつ慈愛のころ永久に伝えん
人々の想いかないていまここに加藤翁の碑は建ちにけり



有代いせ

春浅し五重の塔の影沈む
妙見宮老幹の花まばら咲き
三日坂母の足跡踏の藁

井俣初枝

祀られし東氏の社木の芽吹く
ぜんまいの長げ城跡や松の風
木の芽雨ふる明るさの城跡かな

河合芳江

観世音
露萌ゆるせせらぎ聞きて不動尊
蒼みどり暗き社叢に蟬時雨
惚れ惚れと仰ぐ観音秋こぼる
観音の澄みし瞳や紅葉散る
冬冷えの心温たむ仏かな

寛 明代

篠脇の裾なだらかに梅咲ける
篠脇の湧井に夢を遊ばせて
わらび摘む下りて阿千葉を振り返り
つれづれに登りし阿千葉小春かな
百年の樹齡つじなお美し

下広すゑ乃

俳額の文字うすれたる春社
馬場跡の桜並木の夕明り
こんこんと殿様清水春浅し
尊星院木もれ陽のそく春の雪

桑田和子

ひしめきて阿千葉城跡の芽吹く木々
旅籠肩に城跡のわらび摘む
耕すや阿千葉城跡を仰ぎ見つ

有代喜平

陶の窯文化の流れ涅槃西風
狛犬の皆それぞれに春の風

有代信濁子

居館跡雪の凝りたる猫柳
春めきて素足に馴染む祠みち
山下の早春の風墓石群
将門の梅散り果てし青梅宿

黒岩きくゑ

移り気な日がふりこぼす春の雪
行きつまりつつ春泥の道遠し
古城跡の東氏の歌碑に風かおる
花並木来て薬師寺の七鈴鏡
伝承の神事がすすむ夏祭り

(五ページよりつづき)

大根も切り取られたからだど指摘されたので、そこへ土を入れて保護することとなった。

八月七日

●東胤駿氏が「七日祭り」に参詣
篠脇城主東氏の末裔、元子爵東胤駿氏は祖先の守護神であった明建神社に詣で、県指定無形民俗文化財である「七日祭り」に参詣された。因に、同日千葉県武射史学会事務局長伊藤一男氏も参詣された。

一〇月二〇日

●大間見白山神社のトネリコ倒覆
村指定天然記念物「白山神社のトネリコ」が、台風一六号にて倒覆した巨管理者から報告があったので、野田会長とともに現地調査したところ、根元より九m位のところにて折れ北方へ倒れていた。

一月四日

●尊星王院の碑建つ
東氏の守護神妙見社の別当寺であった尊星王院の跡といわれている地から出土した四耳壺(村指定重要文化財)の中にあつた人骨を納めて、右ゆかりの地明建神社の傍らに「尊星王院之碑」が建てられ、一月四日盛大に除幕式が行なわれた。この碑の題字は東胤駿氏の書であり、当日は氏も出席された。

一月六日

●愛知県陶磁資料館にて開催の「猿投窯の流れ展」に福田古墳出土品の出品方依頼あり、二点を貸し出す。

一月九日

●松尾城跡の碑建つ
村指定史跡松尾城跡(口大間見字城山)に同城跡保存会の骨折りで、松尾城跡の碑が建てられた。碑の題字は本村出身の書家野田白都氏の筆で、同日盛大に除幕式が行なわれた。

(土松記)

昭和五四年 度

事業 報告

四月二一日

○支部総会

於村民センター 四二名出席
昭和五三年度事業報告および収支決算承認、昭和五四年事業計画および収支予算承認、規約の一部改正、役員選出

〔注〕本総会において「岐阜県文化財保護協会大和村支部」を「大和村文化財保護協会」と改称することに決議されました。

○記念講演

「郡上の祭り、明建神社の七日祭りを中心として」日置弥三郎先生

五月二〇日

○現地研修

岐阜県博物館特別展「濃飛の先史時代―縄文土器と神秘」見学および、関市文化会館、新長谷寺、善光寺等を見学
参加者
高橋明、小池久江、野田直治、野田茂、青木新三、村井正蔵、池田弘、清水作衛、小野江暎量、坪井真澄、坪井庄市、河合恒、

土松新逸、木島泉、鷺見鈴子、田中まささを、鷺見おと、松井直井口一雄、鷺見ゆき、清水貞子

清水美佐子、清水幸江、前田孝岩谷ますの、有代喜平、尾藤由有代信吾、有代いせ、下広茂一

下広すゑの、永谷広、森藤幸、此島広、須甲甚一、山田長次、若山清、山田昌枝、松井京二、

婦人会より特別参加四四名
六月五日

○県本部総会
本会より野田直治、有代信吾
土松新逸の三名出席
六月二七日

○役員会
於村民センター 一二名出席
村内文化財現地研修について
八月五日

○現地研修
村内文化財（天然記念物）の見学
参加者
高橋明、河合俊次、河合芳江、田中裕、野田直治、清水作衛、河合恒、日置繁、小野江暎量、池田弘、小池八重子、坪井庄市

松井直、井口一男、佐藤秀夫、古田忠、畑中浄園、稲葉春吉、森助二、黒岩きくゑ、土松新逸

鷺見おと、鷺見ゆき、大場賢一、島崎英二、田代俊雄、前田孝、加藤一男、日置元衛、粥川溜、

松井京二、細川優、森みね子、有代喜平、有代信吾、有代いせ
森藤幸、此島広、山田長次、山田昌枝、山田良、山田良一
九月三〇日

○会報「文化財やまと」第三号発行、会員および関係機関へ配付
一〇月二二日

○役員会
於村民センター 一二名出席
東氏居館跡について
現地研修「正倉院展」見学につ
五月二七日

一〇月三二日
○現地研修
奈良博物館における特別展「正倉院展」を見学
参加者
有代喜平、有代信吾、有代いせ
岩谷とし子、粥川溜、河合俊次
河合芳江、木島泉、木島観一、

木島三郎、木島洋女、桑田渥美
小池久江、此島広、清水のり子
清水幸江、下広すゑの、下広茂一、須甲甚一、鷺見おと、鷺見鈴子、高橋明、田中まささを、土松新逸、永谷広、野田直治、畑

中清子、畑中浄園、日置貞一、日置智夫、日置元衛、尾藤由、松井直、森藤幸、山田良一、若山清、外に八幡町より二名、高鷺村より四名、美並村より一名
参加
一月二八日

○役員会
於村民センター 一六名出席
「猿投窯の流れ展」と「日展」
見学について
二月三日

○臨時現地研修
愛知県陶磁資料館における「猿投窯の流れ展」および愛知県美術館における「日展」見学
参加者
高橋義一、高橋明、小池久江、河合俊次、河合恒、野田直治、青木新三、村井正蔵、日置繁、大野隆成、池田弘、山下直美、小池八重子、松井隆、松井直、坪井政夫、井口一夫、井俣初枝、稲葉春吉、黒岩きくゑ、木島泉、土松新逸、鷺見おと、大場賢一、直井すゑ江、矢野原幸子、清水美佐子、尾藤元子、岩谷ますの、日置元衛、森みね子、有代喜平、有代信吾、下広茂一、森藤幸、須甲甚一、山田長次、山田昌枝

森教雄、山田良一、松井京二、佐藤とき子（特別参加）
二月二三日

○文化財審議委員と役員の間合研
修
名古屋博物館における特別展「東海の古墳時代」を見学
参加者
野田直治、森藤幸、土松新逸、此島広、高橋明、松井直、有代喜平（有代信吾代）、田中裕、高橋義一、佐藤とき子（特別参加）

新会 員 紹 介

桑田 渥美 万場 電話二四四六

次号原稿募集

- 一、見学記 八〇〇字程度
 - 二、見学主材短歌 三〜五首 俳句 三〜五句
 - 三、原稿〆切 五五年八月末日 発刊予定 〃 九月末日
- 宛先 大和村文化財保護協会事務所（教育委員会内）

昭和五五年度 事業計画

一、会議

○総会の開催 四月一九日

○役員会の開催 四、六、九、一

三の各月および臨時会

○常任委員会 随時

二、見学および研修会

○文化財に関する講演会

四月一九日

○現地研修(見学)の実施

朝倉館の見学 五月上旬

村内文化財(無形民俗)見学

八月七日

正倉院展見学 一月

本部主催研修事業に参加

その他臨時文化財見学

三、会報「文化財やまと」の発行

B5版八ページ 二回

各三〇〇部 九月、三月

四、文化財保護調査に協力

○東氏居館跡発掘調査

○その他

昭和54年度会計報告

収入の部

科 目	決 算 額
1. 前年度繰越金	9,531
2. 会費	4,750
3. 特別会	47,010
4. 補助金	5,000
5. 諸収入	4,283
計	61,864

支出の部

1. 会議費	3,955
（総会費）	6,450
（役員会費）	3,310
2. 事業費	55,897
（研修費）	50,897
（会報発行費）	5,000
3. 需要費	9,000
（負担金）	1,500
（消耗品費）	3,500
（通信運搬費）	4,000
4. 予備費	5,600
計	61,312

差引(来年度繰越金) 5,544

昭和55年度予算(案)

収入の部

科 目	本年度予算額
1. 前年度繰越金	5,544
2. 会費	171,000
3. 特別会	350,000
4. 補助金	50,000
5. 諸収入	1,456
計	578,000

支出の部

1. 会議費	50,000
（総会費）	20,000
（役員会費）	30,000
2. 事業費	432,000
（研修費）	372,000
（会報発行費）	60,000
3. 需要費	8,000
（消耗品費）	4,000
（通信運搬費）	4,000
4. 負担金	87,000
（会費）	85,500
（理事員分）	1,500
5. 予備費	1,000
計	578,000

文化財の愛護者に

ご参加下さい

○文化財は、祖先が残してくれた大切な公共の財産です。わたしたちの身近なところにある、数々の文化財をみんなの力で護ってゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから四年目をむかえました。この際多くの方々に会員となつていただいで、本会の発展を期してゆきたいと思ひます。

○会員の特典として

●保護協会本部発行の「濃飛の文化財」(年二回)および特集「文化財美濃と飛騨」をお届けします。

●本会の会報「文化財やまと」(年二回)をお届けします。

●県本部主催の見学会・講演会・研究会に参加できます。

●本会主催の文化財の見学その他の研究会・講演会・文化財めぐり等に参加できます。

○会員になるには、年額一五〇〇円をそえて、事務局(大和村教育委員会内)または、地区の理事へ申し込んで下さい。

編集後記

▼いつまでも寒さがつづいていたこの春もようやく春らしくなりました。鶯の声が朝の部屋へ聞こえてきます。

▼会報第四号をお届けします。本年度もいろいろの行事が、多くの会員各位のご参加を得てとどおりなく実行され、ご同慶にたえません。今後より多くのご参加を得て、みよりの多いものにしたと祈念します。

▼見学記が今回は予定どおり集まりませんでした。短歌や俳句を寄せて下さって内容を豊かにすることができました。寄稿して下さい。今年はおおの花がきれいに咲き、豊年が期待できるようです。文化的にも豊かな年であるように祈ります。

▼昨年六月篠脇山麓に東氏居館跡と思われるものがわかり、今年度から発掘調査されることとなりましたが、東氏文化を調査するためこの発掘調査は大事なことです。会員各位のご協力をお願いします。(土松記)